

第 1 1 5 回 システム自然科学研究科セミナー

第 3 6 回 生物多様性研究センターセミナー

- 日時：平成 2 6 年 1 2 月 2 5 日（木） 午後 7 時より
- 場所：名古屋市立大学 山の畑キャンパス
4 号館大講義室
- 講師：川本 芳 氏（京都大学・霊長類研究所・准教授）
- 題目：交雑をめぐる二つの話題

生物多様性の危機として挙げられる外来種の影響をめぐり、改正外来生物法が本年 6 月から施行された。国内では、野生化した外来種（アカゲザルや台湾ザル）とニホンザルの交雑が進み、今回の法改正で新しい問題が表面化している。サルをめぐる外来種の交雑問題を第 1 の話題とする。近縁なサルの種間では、飼育下で交雑が起きることはよく知られている。しかし、野生化した外来種では、ケースにより交雑の頻度や進行状況にちがいがあある。房総半島のアカゲザル交雑では、ニホンザル側への遺伝子浸透の拡大が懸念され、その影響を排除する制度の在り方が問題になりはじめている。

野生生物とは対照的に、動植物のドメスティケーションとその後の利用では、交雑（交配）が行われてきた。アンデスやヒマラヤ高地へ適応した現代人は、ユニークな野生生物を利用してきた。ペルーとブータンで行っている家畜研究をもとに、高地における家畜化と交雑利用を第 2 の話題とする。アンデス高地ではラクダ科家畜のリヤマとアルパカが生まれ、特異な畜産文化がつけられてきた。家畜の起原および改良と交雑の関わりが議論されている。ヒマラヤ高地ではヤクが、低地ではウシやミタンなどが家畜化された。ヒマラヤ南部には、これらの家畜を利用した交雑文化が生まれた。この文化の多様性と生物学的背景について紹介する。

野生動物と家畜の交雑話題を重ねて、生物資源の保存と利用の今後を考える議論のきっかけを提供できたらと考えている。

山の畑キャンパスへの道順：<http://www.nsc.nagoya-cu.ac.jp/location.html>

問合せ先：森山 昭彦（名市大システム自然科学研究科、電話：(052)872-5851）